

河川の仕事に関わって18年

18-year Engagement in Works Relating with Rivers



株式会社建設技術研究所東京本社水工部グループリーダー

なか やましゅうさく

中山 修作

Shyusaku NAKAYAMA

1. はじめに

1月の中旬、「うちの川ファン」の原稿執筆依頼を受けました。何を書いたらいいか思いつかず、しかも「新企画」ということでとまどいましたが、自分を振り返る良い機会だと思い、執筆依頼を受けました。

私は、平成12年4月に建設技術研究所に入社し、今年で18年目となります。入社以来、河川構造物の設計や多自然川づくりなど、河川に関わる仕事に携わってきました。

最初の配属先は、九州支社でした。九州支社で6年お世話になったあと、東京本社で8年、北海道支社で3年と日本を南から北へと縦断し、現在は東京本社に勤務しています。私の体は、各地のおいしい食べ物とお酒でできているようなものです。

2. これまでの業務経験

1) 多自然川づくり

一番最初に携わった多自然川づくりは、九州支社に勤務していた入社4年目の頃、奄美大島にある役勝川の河道計画業務です。役勝川は、奄美大島だけで確認されているリュウキュウアユが生息し、河口部はマングローブの原生林となっており、優れた自然環境が残っている河川です〈写真—1〉。一方、台風による床上浸水被害が発生しており、優れた自然環境を保全した河道計画の立案が早急に求められている河川でもあります。

多自然川づくりについて無知だった私は、多くの方々にアドバイスをもらって成果を作成し、学識経験者とも協議するという経験をしました。「中山君、奄美大島行きたくない？」という甘い言葉に誘われ始まった業務ですが、当時の上司に感謝です。また、この業務を経験論文として、技術士の資格も取得することができました。



〈写真—1〉 役勝川（鹿児島）

東京本社に転勤後もこの業務をきっかけに多自然川づくりの仕事を多く手がける事となりました。その1つが島谷九州大学大学院教授を座長とする「多自然川づくり研究会」や「多自然ポイントブックⅡ」の編集スタッフとしての参加です。スタッフとして「多自然アドバイザー」の同行やヒアリング・資料収集のために、元町川（岩手県）や山附川（宮崎県）など全国の川を見て歩きました。また、多自然川づくりを実践する方々の貴重な生のご意見を聞くこともできました。また、Nfrw（Nature friendly river workshop）に参加する機会もいただき、各国の河川事業の取組みや多自然川づくりについて知る機会もいただきました。これらの経験を生かし、〈写真—2〉に示すような良好な川づくりをいつしか実践したいものです。



〈写真—2〉山附川（宮崎県高千穂町）

4. さいごに

私は、河川技術者としては、まだまだ半人前です。それを知ってか、どうやら神様は優秀な上司や部下、スタッフと仕事をする機会をたくさん与えてくれているようです。仕事を通じて多くの技術を学び少しでも一人前に近づけるように日々精進したいと思います。

さいごに、これまでの業務を振り返る良い機会を与えていただいた日本河川協会に感謝申し上げます。

2) 河川構造物の維持管理

最近では、河川構造物に関する課題の1つに挙げられる維持管理ですが、私が最初に携わったのは、13年前のことです。今では、河川維持管理技術者・河川点検士といった維持管理に特化した資格も創設され、河川構造物の維持管理の重要性が認知されています。

当時は、まだ、河川構造物の維持管理に対する認知度が低く、社内でも河川構造物の維持管理業務を検討していたのは、維持管理の重要性にいち早く気づいた上司2人と私を含めた3人のみでした。その3人が悪戦苦闘しながら、果敢に挑んだのが、静岡県の水門・陸閘を対象にした維持管理業務です。平成15年度に策定された「土木施設長寿命化行動方針（案）」に基づき、計画的・効率的な維持管理の具体的実施策を検討し、「水門・陸閘ガイドライン」として取りまとめました。

河川構造物の維持管理に関する知見が少ない中、橋梁や道路の先進事例の情報収集や専門家へのヒアリング、発注者とのディスカッションを通して、取りまとめたもので、特に苦労した業務の1つでもあります。発注者との一体感を感じた業務でした。

私が管理技術者として初めて携わった業務も石川県の防潮水門の維持管理検討業務でした。

3. 河川に関わる仕事で心がけていきたいこと

これからの仕事は、河川構造物の分野だけでは、解決できない課題を抱えた仕事が増えます。そのため、道路や環境等の色々な分野の方々とチームを組んで課題解決にあたる必要があります。当社は、それらのニーズに応える体制が整っており、また私自身その一端を担えることは、河川技術者にとって幸せなことだと思います。今後、いろいろな分野との連携を密に図りながら、チームとしてのパフォーマンスを最大限に発揮し、“いい仕事をしたな〜”と思える回数を増やしていきたいと思っています。